

# 図書館 だより

第 22 号  
1994. 12. 20 発行

編集兼発行 三重短期大学附属図書館 〒514-01三重県津市一身田中野157 TEL0592-32-2341

## 目 次

市民社会と企業社会 .....	神 谷 章 生 (1)
P. バック「大地」の世界と現代中国 .....	新 家 増 美 (3)
新規受入図書案内 (1994年 4月～1994年 8月受入分) .....	(5)

## ■ 市民社会と企業社会 ■

神 谷 章 生

以下の文章は、市民団体「大阪市民ネットワーク」(1994年2月～3月、3回)で講義した原稿に若干手を加えたものの第1回分である。

一、市民として政治参加について考える：民主主義の「基礎」としての市民の営み。

私たちは、現代政治を語る際、「住民が主人公」「民主的な地方自治を」などを語ることがある。そしてまた、このような事は自明なことであり(取り分け、何等かの市民運動や政治運動に関わっている人の場合)、吟味する必要のないものであるとされる。しかし、ここでもう一度、「主人公」とは一体誰なのか。また、「主人公」たるに相応しい資質を私たちが身につけるにはどのようなすれば(どのようになれば)良いのかを考えることは、これからの私たちの運動を一步でも前進させるのになにがしかの貢献を果たし得るのではないだろうか。少なくとも私はそう考えている。

かつて丸山真男氏は「『であること』と『すること』」(『日本の思想』、岩波新書)というエッセーで次のように語っている。私たちの運動にとっても極めて示唆に富む内容なのでまずそのことを皆さんと共有した

い。

民法上に「時効」という規定があるのは、なぜだろうか。借金は棒引きされるし、債権は無効になる。良く考えてみるとおかしいような気がする。丸山氏は大学時代、末弘厳太郎(日本の民法学の礎を築いた人物の一人、今も日本評論社から発行されている『法律時報』という雑誌は、末弘氏の創刊したもので、民主的法学者や社会科学者の研究発表の場となっている)教授から受けた講義を回想している。末弘教授は、「金を借りて催促されないのをいいことにして、ネコババを決め込む不心得者がトクをして、気の弱い善人の貸し手が結局損をするという結果になるのはずいぶん不人情な話のように思われるけれども、この規定の根拠には、権利の上に長く眠っているものは民法の保護に値しないという趣旨も含まれている」と語った。民法では、「請求する行為」によって「時効」を中断しない限り、単に自分は「債権者」であるという位置に安住していると、ついには債権それ自体も喪失してしまうのである。

「であること」と「すること」というエッセーの内容はここにある。近代社会に生きている私たちは、「主権者である」という位置に安住して、不断に「主権者になる(する)」行為をしないと、知らぬうちに「主権者」である地位をも失っていると言う事に

なりかねない。戦前の日本は、国民はいかなる意味においても「主権者」たり得なかったが、ヒットラーを生み出したドイツでは、ワイマール民主主義の下で「国民の選択」によって独裁政治を作り出した。今の日本がワイマールドイツのようにならないという保証はない。今度ファシズムを生み出したときの責任は国民が背負わざるを得ないのである。

しかし、「自由を祝福することはやさしい。それに比べて自由を擁護することは困難である。しかし自由を擁護することに比べて、自由を市民が日々行使することはさらに困難である」。しかし、日々自由（や民主主義）を行使することによってはじめて、人は自由（や民主主義）になることができる。そのように考える人が徐々にではあれ増えてくることによって、私たちの住む社会が少しでも住み良い社会になることができるのだとだけはいうことができると思う。

## 二、日本社会の「特殊性」について考える。

### ①カローシ社会、大量失業社会、「三種の神器」

半年ぐらい前の土曜日（1994.2.12）、テレビ朝日系の『ザ・スクープ』は、「追跡・大不況で会社人間を襲う解雇の嵐」と題して放送された。番組の内容は、企業の論理によって企業戦士としてカローシ寸前まで働き続けてきた中高年管理職が使い捨てられている現実を赤裸々に描写していた。企業の人事担当重役は、「今40歳を越えている社員はすべて整理対象であり、一部の幹部候補生をのぞいて用はない」と「本音」をはっきり主張する。その言葉には「情け容赦」のひとつかけらもない。これがほんの数年前まで「豊かさとはなにか」を語り、日本的労使関係と日本の繁栄を語っていた社会と同じ社会なのだろうか。日本的労使関係というのは、「年功序列賃金」、「終身雇用」、「企業別労働組合」の三つの特徴を持つ企業形態のことであって、この三つを称して「三種の神器」とされていた。この「三種の神器」を日本の企業が持っていたことにより、日本企業は世界的不況の中で唯一高成長を持続し、世界経済の頂点を極めつつあ

ると語られていた。「アメリッポン」、「ジャパメリカ」、「ブルーラルヘゲモニー」などと将来構想が登場したが、どれにしても21世紀には日本が世界経済のヘゲモニーをアメリカに代って（と共に）握るという点では共通していた。それ程の活躍をした「三種の神器」がいまでは、「日本経済の障害物」などとされているのを見ると、社会学者というのは一体なにをやっているんだろうという思いを強くせざるを得ない。状況が良ければ、その状況を正当化する理屈を考え、逆に不況になれば先の正当化の論理を忘れたかのように否定してみせる。株式評論家といわれる人種はその最たるものだが、多かれ少なかれ「哲学のない」社会学者も似たようなものである。

日本の「低福祉」も日本社会の「特殊性」のひとつである。この問題も先の日本企業の三種の神器と深い関連がある。日本企業は、年功序列と終身雇用を保証することによって、それぞれの企業が従業員の住宅（社宅、あるいは「持ち家」制度）から生涯年金までも保証するので、国家的「画一的」な福祉政策は額としては少ないのだといわれていた。もちろん、このような事は松下やトヨタなど巨大独占企業にのみが享受できた（実はそれ程はできていない。後で述べる）特権であったにすぎないのだが。これを研究者の世界では、「日本型福祉社会」と称され日本資本主義の繁栄と福祉政策の「充実」とを旨くミックスさせた、世界に誇るべき体制であると主張された。1989年当時出版された熊沢誠氏の『日本的経営の明暗』（筑摩）では、このような体制が欧州やアジアに移植されている事実を描いていた。

しかし、今現在、当時とは完全に逆の意味で日本社会の「特殊性」を語る事が可能になってしまった。どういう事かということ、現在進行している日本企業の「三種の神器」の放棄は、日本社会を世界に冠たる「低福祉国家」へとたたき落としてしまう可能性があるということである。不況時に維持できないでなにか「日本的労使関係」「日本型福祉社会」かといわざるを得ない。

## ②日本社会の「特殊性」の原因；日本資本主義の「基軸」と「周辺」

それではなぜ日本社会はこのような世界的に見ても特異な国家になったのだろうか。いろいろな原因（日本的伝統、政治風土、共同体意識）が考えられるだろうが、ここでは資本主義的企業の対抗勢力である社会民主主義の日本的在り方に焦点を当てて考えてみたい。そもそも社会民主主義勢力というのは、多かれ少なかれ西欧においては第二次大戦後、政権につき、それぞれの国の資本家との「妥協」の中で福祉国家を建設していった。その在り方は、労資協調路線であったが、組織された労働者階級の力の台頭の下で、現存体制を維持・存続するためにも労働者階級の要求をある程度受け入れ、その力を体制内に吸収することを余儀なくさせたところに西欧の社会民主主義の特徴があった。そのような社会民主主義勢力の在り方に比して、日本の社会民主主義の特徴は次のような点にある。

一つは、日本の社会民主主義はその無力さのゆえに支配層に対し福祉国家政策を押し付けることができなかったと言うことである（渡辺治『「豊かな社会」日本の構造』など）。それゆえ、日本社会の無制限な資本蓄積にとっては何等障害となることができず、存在感を希薄化させてしまっている。さらに現在では、日本社会党の分裂解体まで予想されている。

次に、日本の社会民主主義勢力は、企業別に組織されている労働組合を基礎に組織された総評、同盟の支持を背景に政治勢力として存在していた。その傾向は、「連合」においても基本的に引き継がれている。国家的低福祉政策と企業内福祉政策は、労働組合をして、企業の業績主義へと自発的に参入させることを容易にした。1950年代後半から激しくなった第二組合の相次ぐ結成とそれによる既存組合への攻撃と衰退は、単に労働者の日和見や資本家の情け容赦ない攻勢のみならず、労働組合の在り方や国家の政策の在り方に根本的な原因があったのであり、それゆえ労働者は自発的に第二組合の主張を受け入れていったプロセスで

もあった。しかし、この方向は、突き詰めれば企業の繁栄のためであるならば必ずしも社会民主主義政党に自分たちの代弁をして貰わなくても良いものであった。現在の連合は、連立与党を視野に押さえているのであって、社会党や民社党などを支持勢力としては必ずしも見ていない。このようなところに日本の社会民主主義勢力の特殊性があった。

## ■ P.バック「大地」の世界と現代中国 ■

新家増美

中国が改革・開放路線に転じて、10数年が過ぎた。その内の3年間を私は北京と上海に暮らした。

1985年秋、北京首都空港から市中心部へ向かう広々とした郊外の直線道路には、農民の馬車と政府や国営企業などの公用車がまばらに行き交っていた。当時はタクシーが非常に少なく、私の乗っているのも清華大学からの迎いの車であった。

くっきりと高く青い空、乾いた空気、巻き舌の北京語・・・私は初めて中国を訪れたにもかかわらず、ずっと前から約束があった場所に予定通りやってきたような気になったものである。小さな町ほどもある広大なキャンパスを一步出れば、そこには留学生社会とはまったくかけ離れた土のおいのする暮らしがあった。自由市場に野菜を売りに来た農民が夕方、家路につく頃、荷車の上には小さなこどもの姿があった。おやつ代わりにかじっている瓜、それを握っている土埃にまみれた小さな手を見ていると、時代も場所も異なる「大地」の世界が思い出された。

周知の通り、「大地」は1920年代の南方中国・安徽・江蘇を描いたパール・バックの代表作である。いつ頃読んだのだろうか。大学に入ったばかりの頃か、高校生の頃だったのか。ただ、乱読していた時期に何となく読み始め、第一部「大地」を読んでは次々とそれに続く「息子たち」、「分裂せる家」の三部作4冊を読

み進んだ。そしてパール・バックその人のことを知りたくて「母の肖像」も一気に読み終えたことはよく覚えている。土の香りと血縁、中国の人のたくましさ、賢さ、粘り強さが全編に流れていて飽きさせない。

とくに第一部は主人公、貧農の王龍（ワンロン）が土とともに生きる姿が生き生きと描かれている。飢饉で故郷を離れてもなお、彼は先祖代々の土地に帰りたい一心で辛苦にめげず、幸運にも恵まれて帰郷する。今や落ちぶれて土地を手放さざるを得なくなった地主から土地を買い取り、次第に自分の所有地を増やし、ついには自らがかつての地主以上の土地を手に入れ、大地主へと登り詰める。今では王龍の妻となった阿蘭（アールン）は、かつて王龍が小作をしていた地主の屋敷きの奴隷であった。纏足していない大きな足をした彼女は美しくはなかったが、口数が極端に少なく忍耐強かった。そして賢かった。働き者で実直な王龍とこの妻は非常によく働き、少しずつ壁に隠す銀貨の量は増えていった。阿蘭はその直前まで畑仕事を続け、たったひとりでお産をすませ、いつも通りに働く。いつのお産も、まるで動物が人目を避けて子を産み落とすようにたったひとりですませる。裕福になって王龍が後房に第二婦人を迎えるようになった時に、かつて彼女が奴隷として過ごした屋敷で、彼女をこき使った女奴隷が召使いとしてやってくることになる。しかし彼女は生涯この女奴隷に自分はこの家の女主人であり、彼女は単なる奴隷に過ぎないのだということを知らせようとする。こうして醜さから人一倍辛い思いをしてきた阿蘭の意地は死ぬまで買われる。日照り続きで土地を離れて南に行き、王龍は苦力、阿蘭と子ども達は物乞いをして暮らしていた頃、民衆が暴動を起こす。その時に、地主の屋敷で他の民衆とともに略奪を働き、手に入れた真珠があった。その他の宝石はみな、土地を買う資金に代えた中で、これだけは、と頼んで自分のものとし、肌身はなさずもっていた阿蘭の宝物である。畑仕事で荒れた手や日に焼けた肌の百姓の女房がそんなものをもってどうするのかといふかる王龍に、彼女は恥じらいながら、「持っているだけでいいのです。」と

いう。しかし、結局、これは歳月を経て、道楽のために王龍に取り上げられてしまうのだ。

阿蘭という女性は、私に中国の農婦のイメージを定着させた。阿蘭に出会ってから10年近く経って、私は一人の農村からきた若い女性と知り合った。彼女は、大都市上海からバスで一日のところにある小さな村から出稼ぎに来ていた。この村は「大地」の舞台となった地方にあり、今も数年に一度、河川が氾濫するのだろうという。村を出るまでは、毎日、天秤棒を担いで何キロも離れた町まで、山を越えて野菜を売りに行っていた。経済改革によって大都市近郊の農村が豊かになり、「万元戸」が話題になっていた頃、地理的にはそう離れていない内陸の農村では、雨が降ればぬかるみ、道もなくなるような状況であった。そんな地方から、少女たちは豊かさを求めて大挙して都市へやってきた。

その多くは子守やお手伝いさんとして住み込みで働いていた。上海で知り合った彼女も一仮にその名を小陳（ジャオチェン）としておこうある家庭で住み込みで子守をしていた。口数が少なく、我慢強く、もくもくと働く彼女の姿を見ていると、私は阿蘭を思い出した。小陳は結婚資金を貯めるまで都会で頑張っているのだと言っていた。

中国では厳しい戸籍管理が行われ、これまで都市と農村の区別が明確になされてきた。つまり、農村に戸籍のある者は都市には定住できないようなシステムになっていたのである。他のアジアの発展途上国が都市の深刻なスラム問題を抱える中で、中国がそれなりの秩序をたもってきたのは、きわめて厳しい戸籍管理によるところが大きい。さらに従来の計画経済期には都市の労働市場が規制され、食糧は配給制であった。ところが1980年代に改革・開放の時代を迎えて以来、社会の流れは大きく変わってきた。都市での建設ラッシュ、農村での村営企業の勃興、第三次産業の発達等々によって、人々の経済活動は活発になり、従来の様々な枠組みが次々と組み替えられていった。都市には個人経営の商店が建ち並び、自由市場も活況を呈していた。そして街には一見してよそ者とわかる人々が何らかの生業を

営み、生活の基盤を築いていた。「上に政策あれば、下に対策あり」といわれるように、合法的に、あるいは非合法すれすれのところで、農村から都市への人の流れは形作られ、徐々に都市内部へと浸透していった。市場経済の導入により、様々な分野で出稼ぎ労働者の担う部分が拡大・定着していったのである。だが、都市戸籍をもたない人々には社会保障がなく、社会的に非常に不利なたちばかり、経済的にも不安定であった。とくに都市に出てきて、結婚し、生まれた子どもが学齢期を迎えたときにどこで教育を受けるのが問題となる。大都市の公立学校への入学資格は無い。そこでいろいろな方策が講じられる。農村から出てきた人々は実にたくましく、その時その時に自らの運命を切り開いて生きている。

小陳の父親も一攫千金を夢見て、何度か都市での商売を試みてはいた。しかし彼は故郷の農地はどんなことがあっても手放さない、と言う。娘が都市でそれなりの生活をし、蓄えもある程度できた頃でさえ、自分たちを守ってくれるのは土地なのだ、と力を込めて話していた。これまでの経験から、政策がどう変わろうと土地をもち続けている限り、なんとかやっていると考えていた。

7割を越える労働者が今も農業に従事している。この内には、戸籍は農村にありながらも都市に住み経済活動を行っている人々も含まれている。中国の改革・開放が沿岸の大都市から内陸都市に拡大し、あたかも都市の様が現代中国の普遍的な姿を呈しているかのような印象を受ける。しかし猛烈な勢いで進む都市の改変は、異郷の工事現場で働く出稼ぎ労働者や新たに建設された工場で働く村の少女たちによって支えられている。そして彼らは好むと好まざるとにかかわらず、農村に深くその根を下ろしている。

都市の人には都市の人の生きる智慧を感じるものの、現代中国の大きなうねりの中に、私には大地の頃からの変わらぬ農民の強さやしたたかさが見え隠れするのである。

## 新規受入図書案内

(1994.4~1994.8)

総記 (000)

### 《岩波新書》

地球環境問題とは何か	米本 昌平
日本の憲法	長谷川 正安
幕末維新の民衆世界	佐藤 誠朗
日本酒	秋山 裕一
日本社会と法	渡辺 洋三他著
ラフカディオ・ハーン	太田 雄三
20世紀美術	宇佐美 圭司
小鳥はなぜ歌うのか	小西 正一
蓮如	五木 寛之
ヴェトナム「豊かさ」への夜明け	坪井 善明
獄中19年	徐 勝
元朝秘史	小澤 重男
中国人口超大国のゆくえ	若林 敬子
日本語の起源	大野 晋
マルチメディア	西垣 通
幽霊画談	水木 しげる
都市開発を考える	大野 輝之
大地動乱の時代	石橋 克彦
よみがえる古代文書	平川 南
三国志演義	井波 律子
ライン河紀行	吾郷 慶一

### 《岩波ブックレット》

21世紀への変革	ヘルムート・シュミット
先住民民族女性	リゴベルタ・メンチュウの挑戦
	岩倉 洋子他著
あるとくべつな幹部警察官の挑戦	松橋 忠光他著
女子学生就職戦線異状あり	
	日本経済新聞婦人家庭部編
国際都市新宿で何が起きているか	渡辺 英綱
人間みな平等	住井 すす
定時制高校青春の歌	南 悟
アイヌ文様刺繍のこころ	チカップ・美恵子
貧困	西川 潤
人口	西川 潤
食糧	西川 潤
先住民とともに生きる	ベス・リシャロン
人生のフィナーレを考える	一番ヶ瀬 康子他著
創造的住まいづくり・まちづくり	近藤 安弘
都市と地図情報システム	
	マップインテグレーション研究会編
知の技法	小林 康夫他著
在日外国人	江崎 恭子他著
図書館サービスと著作権	

日本図書協会著作権問題委員会編  
無断コピー・転載を禁ず  
著作権  
森 法正  
日本著作協議会編  
生体膜とは何か 神原 武志  
脳内麻薬と頭部の健康 大木 圭介  
地理情報システム 高阪 宏行

哲学 (100)

間隔・知覚心理学ハンドブック 大山 正他著  
実践感覚1・2 今村 仁司他著  
衣服と装身の心理学 神山 進  
生涯発達心理学1〜3 東 洋他著  
父子関係の心理学 F. A. ペダーセン  
発達心理学用語辞典 山本 多喜司  
正義とはなにか 齊藤 規  
哲学再入門 高田 求  
発達心理学概説上・下 秋葉 英則  
カントからヘーゲルへ 岩崎 武雄  
幸運姓名判断 山口 純一郎  
ズバリの中夢占い事典 武藤 安隆

歴史 (200)

日本史年表 安江 良介  
世界史年表 安江 良介  
新日本地名索引1〜3 金井 弘夫  
イスラム都市の変容 寺阪 昭信  
消されたポットウ 田中 典子  
ヨルダン野の花の国で 塩尻 和子  
カナダの土地と人々 島崎 博文  
日本近世都市史の研究 脇田 修  
昭和史II 中村 隆英  
昭和史の謎を追う上・下 秦 郁彦  
社会帝国主義史 イギリスの経験 野口 建彦他著  
ヨーロッパとは何か クシントフ・ボミアン  
ジェントルマン資本主義と大英帝国 P. J. ケイン他著  
大津事件の再構成 新井 勉  
明治史研究雑纂 手塚 豊  
律令研究統貂 利光 三津夫  
図説津・久居の歴史上・下 樋田 清砂

社会科学 (300)

六法全書 平成6年版I・II 江草 忠敬  
平成5年度学校基本調査報告書 文部省  
日本統計年鑑 平成5・6年 日本統計協会  
全国短大・高専職員録 平成5年版

全国大学職員録 平成5年版(国立大学編)  
全国大学職員録 平成5年版(私立大学編)  
村上 やえ  
民法 親族・相続 大久保 一徳他著  
昭和63年度公開講座  
三重県ゆかりの作家たち  
平成元年度公開講座  
いま、バイオで変わる私たちの生活  
平成2年度公開講座  
地域産業 いま、むかしそしてこれから  
平成3年度公開講座  
家族とわたし(夫婦・親子の心理学)  
平成4年度公開講座  
コンピュータがひろげる世界  
平成5年度公開講座  
三重県における女子労働の現状と課題  
津市立三重短期大学  
金融辞典 神尾 昭男  
文部統計要覧 平成6年版 文部省  
現代憲法問題の分析 渡辺 久丸  
地方財政白書 平成6年版 自治省  
国民経済計算年版 平成6年版

経済企画庁経済研究所  
日本民家語彙解説辞典  
日本建築学会民家語彙収録部会  
高齢化社会の経済政策 金森 久雄他著  
生命系の社会科学 安江 良介  
資本論体系5 利潤・生産価格 江草 忠敬  
憲法改正批判 渡辺 治他著  
公立大学に関する研究 村田 鈴子  
主権と自由の現代的課題  
杉原泰雄教授退官記念論文集刊行会  
法規分類大全16 官職内(7) 内閣記録局  
教育測定学 上・下 ロバート・L・リン  
生徒指導と学校カウンセリング 坂野 雄二他著  
子どもの発達と学校生活 菊地 武勉他著  
国際理解教育と教育実践

第1巻 アジア諸国の社会・教育・生活と文化 馬越 徹  
第3巻 西ヨーロッパ諸国の社会・教育・生活と文化 桑原 敏明  
第5巻 オセアニア・中南米諸国の社会・教育・生活と文化 清水 良雄  
第6巻 北米諸国の社会・教育・生活と文化 二宮 皓  
第7巻 国際理解教育における海外子女教育I 園 一彦  
第8巻 国際理解教育における海外子女教育II 野田 一郎  
第9巻 国際理解教育における帰国子女教育 天野 正治

理科における国際理解教育	水谷 要治	算数・数学における国際理解教育	岡本 光司
図工・工作・美術科における国際理解教育	村上 暁郎	中学校、高等学校地理・公民科における国際理解教育	中島 章夫
音楽における国際理解教育	河口 道朗	技術科・家庭科における国際理解教育	鈴木 寿雄他著
支配の社会学Ⅰ・Ⅱ	世良 晃志郎	国語における国際理解教育	倉澤 栄吉
法社会学	世良 晃志郎	日本をダメにした九人の政治家	浜田 幸一
都市の類型学	世良 晃志郎	裁判傍聴ハンドブック	
支配の諸類型	世良 晃志郎	裁判ウォッチング実行委員会	
音楽社会学	安藤 英治他著	刑事訴訟法 第2版	福井 厚
宗教社会学	武藤 一雄他著	子どもの人権 新時代	津田 玄児
市町村人口推計マニュアル	石川 晃	死刑論	辻本 義男
地理教育論序説	西脇 保幸	人間の目でみる刑法	船山 泰範
中国人の都市と空間	伊原 弘	刑事法小辞典	中山 研一
国際関係学	百瀬 宏	フランス現代史のなかの女たち	ミシェル・ペロー
国民国家を問う	歴史学研究会	新しい学力と子ども	岩辺 泰史
いま、なぜ民族か	蓮實 重彦他著	授業が生きたときめき実験	アルケミストの会
ヨーロッパ連合への道	石川 謙次郎	大学の授業を変える16章	浅野 誠
統一ヨーロッパへの道	デレック・ヒーター	学びのための授業論	グループ・ディダクティカ
家庭科の授業	武藤 八重子他著	比較文化キーワード1・2	竹内 実他著
家庭生活の授業	舟木 美保子	モンゴメリーの監査論	中央監査法人
家族・家庭生活をどう教えるか	日本家庭科教育学会	英和会計経理用語辞典	新井 清光
家庭生活領域の研究と実践	日本家庭科教育学会	日本衣服文化史要説	山名 邦和
着装と文化	斎藤 祥子	消費者教育論	今井 光映他著
両から円へ	山本 有造	製造物責任制度を中心とした総合的な消費者被害防止、救済の在り方について	経済企画庁国民生活局消費者行政第一課
被服と身体装飾の社会心理学	S・カイザー	消費者問題を学ぶ	正田 彬他著
法規分類大全	内閣記録局	現代アメリカ合衆国	福田 茂夫他著
第10巻 官職門1		女性と生涯学習	堀田 剛吉他著
第11巻 " 2		文化人類学を学ぶ人のために	米山 俊道他著
第12巻 " 3		日本ハム	経済会ポケット社史編集委員会
第13巻 " 4		文化シャッター	"
第14巻 " 5		小野田セメント	"
第15巻 " 6		大成建設	"
第17巻 " 8		丸紅	"
第18巻 " 9		三洋電気	"
第19巻 " 10		リコー	"
第72巻 " 11		日本アイ・ビー・エム	"
第73巻 " 12		東洋製鋼	"
第74巻 " 13		西濃運輸	"
国際理解教育と教育実践		東京電力	"
第2巻 中東・アフリカ諸国の社会・教育・生活と文化	大野 正雄	三井建設	"
第4巻 旧ソ連・東ヨーロッパ・北ヨーロッパ諸国の社会教育・生活と文化	川野辺 敏	三菱石油	"
第10巻 国際理解教育における教育の国際交流と外国人教育	大高 常昭	資生堂	"
第11巻 国際理解教育における国際学校の教育	中西 晃	東ソー	"
社会科と生活科における国際理解教育	市川 博	そごう	"
外国語における国際理解教育	堀口 俊一	大王製紙	"
		凸版印刷	"
		サンゲツ	"
		大和証券	"

安田火災	〃	入門経済のための統計学	加納 悟他著
長谷エコーポレーション	〃	エイズの授業	北沢 杏子
日本電気	〃	図表でみる女の現在 男女共生への指標	横浜市女性協会
オカモト	〃	地域福祉の原動力	真田 是
富士ゼロックス	〃	日本女性の歴史 女のはたらき	総合女性史研究会
コニカ	〃	戦後教育改革の精神と現実	浪本 勝年
アサヒビール	〃	自分探しの旅を豊かに	前島 康男
第一生命	〃	中学生の進路と偏差値問題	菊地 良輔
オリエントコーポレーション	〃	現代社会と教育	
コニー	〃	3 学校	教育科学研究会
バイオニア	〃	4 知と学び	〃
ユニデン	〃	6 教師	〃
山一証券	〃	学校給食	兩宮 正子
清水建設	〃	新教育過程と道徳教育	山口 和孝
三菱石油	〃	子どもの心によりそう中学教師	春日井 敏之
スラムの経済学	東京大学出版会	教育心理学	心理科学研究会
国際金融の現状	伊藤 隆敏	日本の民主教育93 教育研究全国集会実行委員会	
全体主義の起源		子どもの問題ケースブック	竹中 哲夫他著
1 ユダヤ主義	ハナ・アーレント	税制改革の新設計8シリーズ	野口 悠紀雄
2 帝国主義	〃	教師と生徒の人間関係	浜名 外喜男他著
3 全体主義	〃	認知心理学者教育を語る	若き認知心理学者の会
現代企業を動かす経営理念	奥村 恵一	新 世界の六大企業集団	奥村 宏
概説マス・コミュニケーション論1		死刑廃止論 第三版	団藤 重光
	早川 善治郎	政治改革と憲法改正	渡辺 治
ギデンズ社会理論の現代像		マスコミの総合理論	稲葉 三千男
	デュルケム・ウェーバー	コミュニケーション発達史	〃
政治論集2	マックス・ウェーバー	コミュニケーションの総合理論	〃
講座憲法法学3 権利の保障	樋口 陽一	メディアの現在形	香内 三郎 他著
入門憲法ゼミナール	浦部 法穂	メディアと情報化の現在	石坂 悦男
先進社会の階級構造	ギデンズ	言論法教材	石村 善治
金融理論と制度改革2	貝塚 啓明他著	言論法研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	石村 善治
金融理論と金融政策の進展開	重原 久美春	行政法入門	原田 尚彦他著
セブン・イレブンの経営史	川辺 信雄	現代日本の法的論点	堤口 康博
近代国民国家の憲法構造	樋口 陽一	欧米住宅物語	早川 和男
憲法判例を読みなおす	樋口 陽一他著	近代憲法法学にとっての論理と価値	樋口 陽一
女性と社会保障	社会保障研究所	メディア学の現在	岡 満男他著
憲法学Ⅱ 人権総論	芦部 信喜	現代政治学の位相	藪野 祐三
自閉症児と学校教育	窪島 務他著	計量政治学	小林 良彰
母とともに治す登校拒否	黒川 昭登	第三世界と経済学	高橋 彰他著
愛と生と性のレッスン	黒柳 美知子他著	憲法Ⅰ 総論・統治	岩間 昭道他著
不登校の再検討	久保 武他著	憲法Ⅱ 基本的人権	〃
増補版 管理・校則・体罰	松田 武己	住まいの人類学	大河 直躬
ホームルームづくり百科	〃	マス・コミュニケーション受容理論の展開	児島 和人
エイズの授業をつくる	〃	シュルツェの庶民銀行論	シュルツェ・デーリチュ
経済経営系のための統計学入門 上	J・E・フロイント 他著	現代社会の子育て	小島 昌夫他著
		新しい社会地理	川田 侃他著
経済対策の基礎分析	横井 弘美	教師用指導書 新しい社会地理	東京書籍
経済政策の理論	館 龍一郎他著	日本の歩みと世界歴史	大濱 徹也他著
貯蓄の経済学	溝口 敏行		
社会サービスの経済学	大野 吉輝		
新統計概論	森田 優三他著		



自然科学(400)

花粉症の治療と予防  
 食品学実験書  
 厚生白書 平成5年版  
 系統看護学講座2 解剖学・生理学  
 病理学  
 歩く、歩くとき、歩けば  
 長寿ライフと健康運動  
 運動処方  
 あなたの骨が危ない  
 人類と起源と進化  
 生理人類学  
 糖尿病 1  
 脳血管障害 2  
 高血圧 3  
 狭心症・心筋梗塞 4  
 腎炎・ネフローゼ 5  
 白血病・悪性リンパ腫 6  
 消化性潰瘍 7  
 気管支喘息 8  
 肝炎 9  
 甲状腺疾患 10  
 慢性リウマチ 11  
 心不全 12  
 胆石症 13  
 貧血 14  
 肝硬変・肝癌 15  
 不整脈 16  
 腎不全 17  
 呼吸器感染症 18  
 高脂血症 19  
 心身症 20  
 西暦3000年の人類  
 健康と生涯  
 骨粗鬆症からあなたを守る本  
 新人類の矛盾  
 糖鎖の多様な世界 1  
 糖鎖の細胞における運命 2  
 細胞社会のグリコバイオロジー 3  
 グリコジンとその世界 4  
 グリコテクノロジー 5  
 グリコパソロジー 6  
 風景のなかの自然地理  
 栄養士必携  
 死生学とはなにか  
 健康ライフワーク論  
 化学元素発見のみち  
 読み切り化学史

小川 浩司他著  
 藤田 修三他著  
 厚生問題研究会  
 日野原 重明  
 高橋 徹  
 青木 純一郎  
 篠田 基行  
 伊藤 明  
 竹内 富貴子  
 江原 昭善  
 富田 守他著  
 赤沼 安夫  
 平井 俊策  
 猿田 享男  
 関口 守衛  
 長沢 俊彦  
 高久 史磨  
 松尾 裕  
 宮本 昭正  
 鈴木 宏  
 長瀬 重信  
 水島 裕  
 杉本 恒明  
 大森 正雄  
 野村 武夫  
 武藤 泰敏  
 早川 弘一  
 黒川 清  
 谷本 普一  
 中村 治雄  
 杉本 恒明  
 フランク ホワイト他著  
 外園 一人  
 小山 嵩夫  
 井尻 正二他著  
 木幡 陽他著  
 永井 克孝他著  
 永井 克孝他著  
 箱守 仙一郎他著  
 木幡 陽他著  
 箱守 仙一郎他著  
 杉谷 隆他著  
 日本栄養士会  
 平山 正実  
 島内 憲夫  
 D. N. トリフォノフ他著  
 渡辺 啓他著

化学と人間の歴史

食品学と食生活 第2版  
 おいしいクスリ 野菜  
 衛生法規  
 食品の安全性評価  
 果実の科学  
 食品機能  
 日本人の所要量  
 原子と分子  
 食品の免疫学  
 病気と細菌毒素  
 ボケは酸素食品で治る  
 子どもの食事 知っておきたいABC  
 食べたいお安全な食品  
 生命科学のための物理科学 上・下  
 科学(物資の状態を探る)  
 医学と社会のあゆみ  
 がんが怖くなくなる日  
 花粉症の科学  
 新ロウソクの科学  
 ガンに勝つ 機能性食品7  
 油脂の栄養と疾病  
 食品と水の科学

大沼 正則  
 豊沢 功他著  
 吉田 企世子  
 野崎 貞彦  
 栗飯原 景昭  
 伊藤 三郎  
 藤巻 正生  
 厚生省  
 B. C. Webster  
 小倉 長雄他著  
 本田 武司  
 松家 豊  
 丸岡 玲子  
 いわさ 恵美  
 D. アイゼンバーク他著  
 影本 彰弘他著  
 P. ローズ  
 明治製菓  
 斎藤 洋三他著  
 P. WATKINS  
 旭丘 光志  
 原 一郎  
 野口 駿

工学・技術(500)

住居学ノート  
 新建築学大系  
 1 建築概論  
 5 現代建築史  
 6 建築造形論  
 7 住民論  
 8 自然環境  
 9 都市環境  
 11 環境心理  
 12 建築安全論  
 13 建築規模論  
 14 ハウジング  
 15 都市建築政策  
 16 都市計画  
 17 都市設計  
 18 集落計画  
 19 市街地整備計画  
 20 住宅地計画  
 21 地域施設計画  
 22 建築企画  
 23 建築計画  
 25 構造計画

西山 卯三  
 大江 宏他著  
 鈴木 博之他著  
 前川 道郎他著  
 扇田 信他著  
 木村 建一他著  
 尾島 俊雄他著  
 乾 正雄他著  
 川越 邦雄他著  
 岡田 光正他著  
 住田 昌二他著  
 養原 敬他著  
 土井 幸平他著  
 渡辺 定夫他著  
 石田 頼房他著  
 土田 旭他著  
 土肥 博他著  
 柳澤 忠他著  
 岩下 秀男他著  
 原 広司他著  
 矢野 克己他著

27 設備計画 井上 宇市他著  
 28 住宅の設計 藤木 昌也他著  
 29 学校の設計 長倉 康彦他著  
 30 図書館・博物館の設計 栗原 嘉一郎他著  
 31 病院の設計 伊藤 誠他著  
 32 福祉施設・レクリエーション施設の設計 寛 和夫他著  
 33 劇場の設計 田邊 健雄他著  
 34 事務所・複合建築の設計 村尾 成文他著  
 35 荷重・外力 和泉 哲也他著  
 36 骨組構造の解析 佐藤 稔夫他著  
 37 板構造の解析 田中 彌壽雄他著  
 38 構造の動的解析 大澤 胖他著  
 39 木質系構造の設計 杉山 英男他著  
 40 金属系構造の設計 藤本 盛久他著  
 41 コンクリート系構造の設計 青山 博之他著  
 43 基礎構造の設計 岸田 英明他著  
 水の神ナガ スマート・ジューマイ 伊藤 安男  
 治水思想の風土 ニューファイバーサイエンス 篠原 昭他著  
 アパレルの素材と製品 文化服装学院  
 生活経済論 秋山 晴子他著  
 生活科学のための人間工学 長町 三生  
 生活科学のすすめ 佐藤 方彦  
 非伝統的家庭の子育て マイケル・E・ラム  
 衣服科学 山崎 和彦  
 快適な衣服を求めて SUSANM WATKINS  
 実践例100 (環境への思いやり) 経済企画庁  
 図説 環境科学 環境情報学センター  
 ファッションと化学 日本化学会  
 新繊維原料学 相宅 省吾他著  
 生活化学 林 淳三  
 衣生活の科学 吉田 敬一他著  
 生活学・生活経営 住田 和子他著  
 和服 熊田 知恵他著  
 被服構成 今松 禮子他著  
 コンパクト建築設計資料集成 (住居) 日本建築学会  
 日本人のすまい (住居と生活の歴史) 稲葉 和也他著  
 地球環境ハンドブック 不破 敬一郎  
 環境科学 I・II・III 河村 武他著  
 集合住宅団地の変遷 佐藤 滋  
 減塩調味の知識 太田 静行  
 夏がある。冬がくる。 宮澤 智士  
 アメリカンホームの文化史 奥出 直人  
 なぜ木綿 日比 暉

産 業 (600)

航空旅客流動と空港後背地 井田 仁康  
 NTT 井上 照行  
 日本テレビ朝日放送 野村 秀和  
 JRグループ 近藤 禎天他著  
 ダイエーコープこうべ 田井 修司他著  
 旭化成・三菱化成 山口 孝他著  
 新日鉄・三菱重工 井上 秀次郎他著  
 日立・東芝 大西 勝明他著  
 東京電力 角瀬 保雄他著  
 トヨタ・日産 丸山 恵也他著  
 鹿島建設・三井不動産 植村 晃久他著  
 住友銀行・野村證券 成田 修身  
 三菱商事・三井物産 逸見 啓他著  
 POSとマーケティング戦略 法政大学産業情報センター編  
 放送が世界を動かす 齋藤 守慶  
 現代マーケティング 車戸 實他著  
 全国ペンション 岩田 光正  
 全国温泉案内 日本交通公社出版事業局  
 全国民宿ガイド 日本交通公社出版事業局  
 全国シティホテル 岩田 光正

芸 術 (700)

最新スポーツ大事典 岸野 雄三  
 最新スポーツ大事典 資料編 岸野 雄三  
 正倉院の組紐 宮内庁蔵版正倉院事務所  
 スポーツ科学辞典 エリッヒ・バイヤー  
 どんぐりの家 山本 おさむ  
 健康と体力科学 中村 誠他著  
 ヘルスサイエンス 川上 雅之他著  
 体育科学第21巻 福永 哲夫  
 かなる甲子園 1~10 山本 おさむ  
 健康と運動の生理 片岡 洵子他著  
 スポーツ医学 I 池上 晴夫

語 学 (800)

ドイツ語の構造 アンソニー・フォックス  
 古期ドイツ語文法 高橋 輝和  
 言語学 風間 喜代三他著  
 ことばコンセプト事典 渡部 昇一  
 現代国語読本 1~9 中村 元他著  
 英作全集 1~10 松本 亨  
 英文法解説 江川 泰一郎  
 当世アメリカ・タブー語事典 馬場 恭子  
 現代用語和英事典 笹井 常三他著  
 英文快読術 行方 昭夫  
 英語適語適用辞典 W. C. バクソン

1 分間英文法活用事典

モートン, S. フリーマン  
日英故事ことわざ事典 池田 彌三郎他著  
英語名詞情報事典 田中 実  
世界を知るためのニュース英語入門

天野 葉生  
グリム (初版) を読む 吉原 高志他著  
リーダーズ・プラス 松田 徳一郎他著  
ドイツ語重要動詞とその用例

日本独文学会ドイツ語教授法委員会  
経済の英語 寺澤 浩二  
ドイツ文法接続法の詳細 関口 存男  
当世アメリカタブー語辞典

H. ヒアードC. サーフ  
角川漢和辞典 貝塚 茂樹他著  
コンサイス露和辞典 井桁 貞敏  
木村・相良独和辞典 相良 守峯  
岩波日中辞典 倉石 武四郎他著  
新コンサイス仏和辞典 川本 茂雄他著  
岩波英和大事典 中島 文雄  
ことばの経済学 フロリアン・クルマス

文 学 (900)

豊臣家の人々 司馬 遼太郎  
桜の樹の下で 渡辺 淳一  
よみがえるロシア 五木 寛之  
氷点 三浦 綾子  
中勤助の恋 富岡 多恵子  
勸奨退職 清水 一行  
銀行消失上・下 山田 智彦  
額田王の暗号 藤村 由加  
竹ノ御所鞠子 杉本 苑子  
アムリタ上・下 吉本 ばなな  
横浜心中 廣瀬 嘉嗣  
卑弥呼伝説 井沢 元彦  
殺人の債権 森村 誠一  
枕詞千年の謎 藤村 由加  
すべての男は消耗品である1, 2 村上 龍  
斉王の葬列 内田 康夫  
ルーズベルトの刺客 西木 正明  
おはなしおはなし 河合 隼雄  
マディソン郡の橋 ロバート・ジェームズ・ウオラー  
人麻呂の暗号 藤村 由加  
湖水の疾風上・下 童門 冬二  
菊亭八百善の人びと 宮尾 登美子  
ぼくは勉強ができない 山田 詠美  
密やかな結晶 小川 洋子  
浴室 ジャンフィリップ・トゥーサン  
あたしが帰る家 群 ようこ

静寂の声上・下  
秋色上・下  
きのね上・下  
五人女捕物くらべ上・下  
隠花平原上・下  
名札のない荷物  
死又路  
さくら・さくら  
やがて哀しき外国語  
トワイライト殺人事件  
絹の道  
とり残されて  
怪談の道  
花影の花  
モモヨまだ九十歳  
氷炎  
風のように、母のたより  
麻酔  
セイロン亭の謎  
文学少女  
弓削道鏡上・下  
銀河の罅  
出逢った頃の君でいて  
マリカの永い夜、バリ島日記  
魔術はささやく  
イギリス古事物語  
泣きたいとき誰がそばにいるの  
ぼくの命を救ってくれなかった君へ

エルヴェ・ギベール  
ひざまずいて足をお舐め 山田 詠美  
色彩の息子 山田 詠美  
上杉鷹山上・下 童門 冬二  
ただいまアメリカ留学中 北村 洋  
北村 崇郎  
19分25秒 引間 徹  
一つよけいなおとぎ話 ジョン・Mエリス  
完訳グリム童話I・II 小澤 俊夫  
川柳のたのしみ 林 富士馬  
人生処方詩集 E・ケストナー  
俳句歳時記 新年・寿・夏・秋・冬

飯田 蛇笏他著  
神曲 ダンテ

渡辺 淳一  
平岩 弓枝  
宮尾 登美子  
平岩 弓枝  
松本 清張  
松本 清張  
森村 誠一  
森 真理子  
村上 春樹  
西村 京太郎  
平岩 弓枝  
宮部 みゆき  
内田 康夫  
平岩 弓枝  
群 ようこ  
高樹 のぶ子  
渡辺 淳一  
渡辺 淳一  
平岩 弓枝  
林 真理子  
黒岩 重吾  
高樹 のぶ子  
内館 牧子  
吉本 ばなな  
宮部 みゆき  
加藤 憲市  
麻生 圭子

1. 2008年12月31日，甲公司“应付账款”科目贷方余额为200万元，其中明细科目贷方余额为180万元，借方余额为20万元；“预付账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“应收账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“预收账款”科目贷方余额为100万元，其中明细科目贷方余额为80万元，借方余额为20万元。甲公司2008年12月31日资产负债表“应付账款”项目期末余额为（ ）万元。

2. 2008年12月31日，甲公司“应付账款”科目贷方余额为200万元，其中明细科目贷方余额为180万元，借方余额为20万元；“预付账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“应收账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“预收账款”科目贷方余额为100万元，其中明细科目贷方余额为80万元，借方余额为20万元。甲公司2008年12月31日资产负债表“应付账款”项目期末余额为（ ）万元。

3. 2008年12月31日，甲公司“应付账款”科目贷方余额为200万元，其中明细科目贷方余额为180万元，借方余额为20万元；“预付账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“应收账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“预收账款”科目贷方余额为100万元，其中明细科目贷方余额为80万元，借方余额为20万元。甲公司2008年12月31日资产负债表“应付账款”项目期末余额为（ ）万元。

4. 2008年12月31日，甲公司“应付账款”科目贷方余额为200万元，其中明细科目贷方余额为180万元，借方余额为20万元；“预付账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“应收账款”科目借方余额为100万元，其中明细科目借方余额为120万元，贷方余额为20万元；“预收账款”科目贷方余额为100万元，其中明细科目贷方余额为80万元，借方余额为20万元。甲公司2008年12月31日资产负债表“应付账款”项目期末余额为（ ）万元。